

座標: 北緯38度18分24秒 東経140度59分18秒

ウィキペディア

多賀城

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

多賀城（たかのき/たがじょう、多賀柵）は、現在の宮城県多賀城市にあった日本の古代城柵。国の**特別史跡**に指定されている（指定名称は「多賀城跡 附 寺跡」）。

奈良時代から平安時代に陸奥国府や鎮守府が置かれ、11世紀中頃までの東北地方の政治・軍事・文化の中心地であった^[2]。なお、周辺はかつて「潟の世界」^{[3][4]}が想定されていたが、1,900～1,500yrBP.にはすでに潟湖的環境は存在せず^[5]、かつて「潟」が存在した証拠の一つと例示された砂押川最下流部の「塩入」「塩留」「塩窪」などの地名についても再検討されている^[6]。

目次

概要

歴史

アクセス

周辺

脚注

参考文献

関連項目

外部リンク

概要

奈良平城京の律令政府が蝦夷を支配するため、軍事拠点として松島丘陵の南東部分である塩釜丘陵上に設置した。平時は陸奥国を治める国府（役所）として機能した。創建は神亀元年

（724）、按察使大野東人が築城したとされる。8世紀初めから11世紀半ばまで存続し、その間大きく4回の造営が行われた。第1期は724年 - 762年、第2期は762年 - 780年で天平宝字6年（762）藤原恵美朝狩が改修してから宝亀11年（780）伊治公磐麻呂の反乱で焼失するまで、第3期は780年 - 869年で焼失の復興から貞観11年（869年）の大地震（貞観地震）による倒壊^[7]および溺死者千人ばかりを出した城下に及ぶ津波^[8]被災^[9]まで、第4期は869年 - 11世紀半ばで地震及び津波被災からの復興から廃絶までに分けられる^[10]。なお、多賀城の「城」としての記載は『日本三代実録』中の貞観津波が「忽至城下」が最後であり、翌貞観12年の日本三代実録では「修理府」、藤原佐世『古今集註孝経』の寛平6年（894）朱書「在陸奥多賀国府」ほか、「府」あるいは「多賀国府」と記載されている^[11]。

多賀城創建以前は、仙台郡山遺跡（現在の仙台市太

	多賀城 （宮城県）
 日本の城郭	
	
	多賀城政庁 正殿跡
城郭構造	古代城柵
築城主	大野東人
築城年	神亀元年（724年）
廃城年	不明
遺構	政庁跡など
指定文化財	国の特別史跡「多賀城跡 附 寺跡」
位置	北緯38度18分24秒 東経140度59分18秒
地図	



東北地方の主な城柵

画像外部リンク

白区)が陸奥国府であったと推定されている。陸奥国府のほか、鎮守府が置かれ^[12]、政

庁や食料を貯蔵す

るための倉などが置かれ、附属寺院が設けられていた。霊亀2年

(716)には、移民によって黒川以北十郡（黒川・賀美・色麻・富田・玉造・志太・長岡・新田・小田・牡鹿）が成立し、神亀元年

(724)には陸奥国府は仙台郡山遺跡から多賀城に移された。北方の備えとして石巻平野から大崎平野にかけては天平五柵（牡鹿柵・新田柵・玉造柵・色麻柵・不明の1柵/中山柵が^[13]が設置され、これらは石背国・石城国・陸奥国に三分された陸奥国を養老4年（720）ふたび統合し、新国府として多賀城を建設し、弱体化した陸奥国の支配強化を図った^[14]。これにより、奈良時代の日本では、平城京を中心に、南に大宰府、北に鎮守府兼陸奥国府の多賀城を建てて一大拠点とした。

多賀城跡とその周辺の調査が1961年から開始され^[15]、外郭は東辺約1000m、西辺約700m、南辺約880m、北辺約860mの築地塀や柵木列がめぐる政庁域が確認された。その中心からやや南寄りに東西約106m、南北約170mの築地塀で囲まれた区域があり、主要な建物の跡と見られる礎石や柱穴が多数確認され、正殿と考えられた^[16]。政庁の南東方向に「多賀城廃寺」（位置）（旧称「高崎廃寺」、城下の山王遺跡の発掘調査では「観音寺」の墨書土器が出土している）、政庁正殿の北側には延喜式内社の多賀神社(六月坂)がある。

多賀城政庁東門跡（位置）に隣接して陸奥国百社を祀る陸奥総社宮がある。陸奥国一宮鹽竈神社（塩竈神社）を精神的支柱として、松島湾・千賀ノ浦（塩竈湊）を国府津とする。都人憧憬の地となり、歌枕が数多く存在する^[17]。政庁がある丘陵の麓には条坊制による都市が築かれ、砂押川の水上交通と東山道の陸上交通が交差する土地として繁栄した。

1966年4月11日、遺跡は国の特別史跡に指定された^[18]。その後も発掘調査が進展した結果、多賀城跡一帯とともに多賀城廃寺跡、館前遺跡（位置）、柏木遺跡（位置）、山王遺跡（位置）などを含む範囲の追加指定がなされている^[19]。

歴史

- 神亀元年（724） - 大野東人によって創建される（多賀城碑）。
- 天平9年（737） - 『続日本紀』に北方を固める「天平五柵」とともに「多賀柵」として初出。天平五柵とは、石巻平野から大崎平野にかけて造営された牡鹿柵・新田柵・玉造柵・色麻柵の四柵と不明の一柵である。伊東信雄は「古代史」『宮城県史』第1巻（1957）で不明の一柵に小田郡中山柵^[20]を充てた。
- 天平宝字6年（762） - 藤原朝狩によって大規模に修造される（多賀城碑）。
- 宝亀11年（780） - 伊治咎麻呂の乱で焼失した後に、再建された事が書かれている。
- 延暦21年（802） - 坂上田村麻呂が蝦夷への討伐を行い、戦線の移動に伴って鎮守府も胆沢城（岩手県奥州市）へ移されて、兵站の機能に移ったと考えられる。
- 貞観11年（869） - 陸奥国で巨大地震（貞観地震）が起こり、地震被害とともに城下は津波によって被災し、溺死者を千人ばかり出している（『日本三代実録』）。この後、「多賀国府」として復興した^[21]。
- 11世紀前半頃までかううじて維持された国府政庁は、11世紀後半には政庁隣接地に平場を設け、政庁に代わる宴会儀礼の場が整備され、国府中枢としての機能は大きく変質した^[22]。
- 11世紀後半の前九年の役や後三年の役においても軍事的拠点として機能し、承徳元年（1097）にも陸奥国府が焼失している。

多賀城市の文化財 > 歴史サロン > 歴史の風^[1]

 多賀城市の古地形

(https://www.city.tagajo.miyagi.jp/bunkazai/shiseki/bunkazai/salon/kyoyu/images/2409_1.jpg)

 /

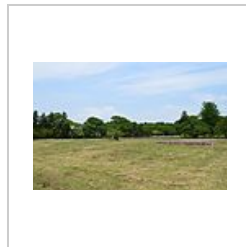


多賀城のステレオ空中写真（1975年）

国土交通省 国土画像情報（カラー空中写真）

(<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch>を基に作成

- 養和元年（1181）には陸奥国府および「高用名」（国府用に由来。南宮荘・岩切村・村岡村ほか）を拠点とする勢力は平泉の藤原秀郷を陸奥守として迎え入れ、八幡館(末の松山) および開発低湿地（八幡荘・中野郷・萩園郷・蒲生郷を私領化。多くは津波被災地）に拠点を置く(陸奥介らの勢力とに袂別した。多賀国府の勢力は文治5年（1189）奥州合戦および大河兼任の乱で没落していったが、八幡館を拠点とする陸奥介は鎌倉幕府から地頭職を得て、鎌倉に屋地を得るまでになっている^[23]。八幡荘は鎌倉将軍家を本所とする関東御領として存続した可能性が強い^[24]。
- 永仁7年（1299）2月朔日に大檀那介平景綱が奥州末松山八幡宮に鐘を奉納している^[25]。
- 南北朝時代には、後醍醐天皇率いる建武政府において陸奥守に任じられた北畠顕家、父の北畠親房らが義良親王（後村上天皇）を奉じて多賀城へ赴き、多賀城に東北地方、および北関東を支配する東北地方の新政府、陸奥将軍府が誕生した。
- 昭和36年（1961）、多賀城跡とその周辺の調査が始まった。
- 昭和41年(1966) 4月11日、遺跡は国の特別史跡に指定された^[26]。

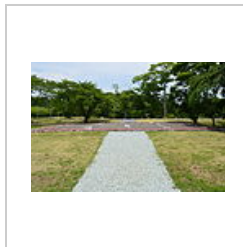


政庁跡全景

現在は全盛期のII期政庁を復元表示。右に東脇殿、左端に西脇殿、中央奥に正殿。

II期政庁跡 復元模型 正殿
多賀城政庁跡で展示。

正殿



後殿



東脇殿



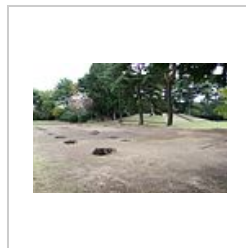
西脇殿



南門



政庁から外郭南門への道路



多賀城廃寺跡



柏木遺跡（製鉄所跡）

アクセス

- 鉄道：JR東北本線（仙石東北ライン）国府多賀城駅より政庁跡まで徒歩約10分。
- 駐車場（無料）：

- 東門跡北側に約15台分（[位置](#)）
 - 政庁跡北東側に舗装約20台分（[位置](#)）
 - 政庁跡南側の南北道路階段下に約20台分（[位置](#)）
 - 多賀城南門跡および多賀城碑の近くに6台分（[位置](#)）
- 最寄IC：[三陸自動車道](#)・[多賀城IC](#)

周辺

- [東北歴史博物館](#) - 出土物の多くを収蔵。
- [多賀城碑](#)
- [末の松山](#)
- [多賀神社](#)
- [浮島神社](#)
- [多賀城神社](#)
- [陸奥総社宮](#)
- [鹽竈神社](#)（[塩竈市](#)）

脚注

- ↑ 多賀城市の文化財 > 歴史サロン > 歴史の風/歴史の風
(<https://www.city.tagajo.miyagi.jp/bunkazai/shiseki/bunkazai/salon/kyoyu/kaze.html>)（多賀城市）
- ↑ 「特別史跡多賀城附寺跡」（多賀城市教育委員会発行パンフレット、2013年）。
- ↑ 斉藤利夫1992「多賀の入海―湊浜・塩竈津の中世―」『よみがえる中世7―みちのくの都 多賀城・松島』入間田宣夫・大石直正編、平凡社、63～65頁
- ↑ 平川南1999「古代地方都市論」『国立歴史民俗博物館研究報告』第78号 国立歴史民俗博物館、1～30頁
- ↑ 松本秀明ほか2013「仙台平野北部七北田川下流域の潟湖埋積過程と土砂流入時期」『日本地理学会発表要旨』No.84 日本地理学会
- ↑ 相原淳一「多賀城と貞観津波」『考古学雑誌』第101巻第1号、1～53ページ、[日本考古学会](#)、2018年12月）
- ↑ 『日本三代実録』ではその被災状況を城郭倉庫 門櫓墙壁 頽落顛覆とし、其の数を知らずとする。また、屋伏壓死する者が出たことは記されるが、圧死者数に関して言及はない。
- ↑ 相原淳一・野口真利江・谷口宏充・千葉達朗2019「貞観津波堆積層の構造と珪藻分析―宮城県多賀城市山王遺跡東西大路南側溝・山元町熊の作遺跡からの検討―」〔1〕
(<https://sitereports.nabunken.go.jp/54312>)『東北歴史博物館研究紀要』20 東北歴史博物館
- ↑ 『日本三代実録』ではその被災状況を海口呻吟 聲似雷霆 驚濤涌潮 浜洄漲長 忽至城下 去海數十百里 浩々不辨其涯諸 原野道路 惣爲滄溟 乗船不遑 登山難及 溺死者千許 資産苗稼 殆無子遺焉 とする。
- ↑ 多賀城碑、今泉隆雄「律令国家と蝦夷」55ページ（渡辺信夫・今泉隆雄・大石直正・難波信雄『宮城県の歴史』山川出版社 1999年3月）
- ↑ 相原淳一「多賀城と貞観津波」『考古学雑誌』第101巻第1号、1～53ページ、[日本考古学会](#)、2018年12月
- ↑ 平成28年（2016）には、鎮守府の存在を裏付ける初めての考古資料として「府符」銘の木簡が出土している（"「鎮守府」示す木簡出土、宮城 -存在裏付け、多賀城跡 -" (<http://this.kiji.is/67901918345807349?c=39546741839462401>)（共同通信、2016年2月4日記事（47NEWS）））。

13. 伊東信雄1957「古代史」『宮城県史』第1巻
14. 今泉隆雄「律令国家と蝦夷」53-54ページ（渡辺信夫・今泉隆雄・大石直正・難波信雄『宮城県の歴史』山川出版社 1999年3月）
15. 宮城県教育委員会 編著『昭和三十六年度多賀城跡発掘調査概報（<http://sitereports.nabunken.go.jp/ja/10012>）』宮城県教育委員会、1962年。
16. 宮城県教育委員会『<http://sitereports.nabunken.go.jp/ja/9469>』宮城県教育委員会、1964年。
17. 末の松山、沖の井（沖の石）、浮島、おもわくの橋などがある。
18. 多賀城跡 附 寺跡 (<https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/401/181>) - 国指定文化財等データベース（文化庁）
19. 特別史跡多賀城跡附寺跡
(<http://www.city.tagajo.miyagi.jp/bunkazai/shiseki/bunkazai/shitebunkazai/kunishite/terato.html>)
（多賀城市教育委員会事務局文化財課・多賀城市埋蔵文化財調査センター「多賀城市の文化財」）
20. 相原淳一・谷口宏充・千葉達朗2019「赤色立体地図・空撮写真からみた城柵官衛遺跡―宮城県石巻市桃生城跡・涌谷町日向館跡とその周辺―」『東北歴史博物館研究紀要』20、<https://sitereports.nabunken.go.jp/54312>
21. 相原淳一「多賀城と貞観津波」『考古学雑誌』第101巻第1号、1～53ページ、日本考古学会、2018年12月）
22. 古川一明2011「十～十一世紀の陸奥国府と府中」『都市のかたち 権力と領域』中世都市研究第16号 中世都市研究会編 山川出版社
23. 三好俊文2013「八幡荘と治承・寿永の内乱」『市史せんだい』Vol.23 仙台市博物館
24. 大石直正1990「陸奥国の荘園と公領―鳥瞰的考察―」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第22号 東北学院大学東北文化研究所
25. 『安永風土記御用書出』
26. 多賀城跡 附 寺跡 (<https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/401/181>) - 国指定文化財等データベース（文化庁）

参考文献

- 考古学の世界 第1巻北海道・東北「城柵(p196～p198)」株式会社ぎょうせい 1993年4月10日発行 ISBN 4-324-03415-X
- 街道の日本史8 仙台・松島と陸前諸街道 吉川弘文館 2004年11月20日発行 ISBN 4-642-06208-4
- 平凡社大百科事典 タイス〜ツン「多賀城(p192～p193)」平凡社 1985年3月25日発行

関連項目

- 城柵
- 貞観津波
- 末の松山
- 蝦夷征討
- 郡山遺跡（仙台市太白区） - 多賀城以前の陸奥国府推定地。

外部リンク

- 多賀城跡 (<http://www.tagakan.jp/category/detail.php?id=8>) - 多賀城市観光協会
- 多賀城史跡めぐり (http://www.thm.pref.miyagi.jp/taga_tour/index.php) - 東北歴史博物館
- 宮城県多賀城跡調査研究所 (<http://www.thm.pref.miyagi.jp/kenkyusyo/index.html>)

- [全国遺跡報告総覧 奈良文化財研究所 \(http://sitereports.nabunken.go.jp/ja\)](http://sitereports.nabunken.go.jp/ja)

「<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=多賀城&oldid=74425503>」から取得

最終更新 2019年9月29日 (日) 05:29（日時は個人設定で未設定ならばUTC）。

テキストはクリエイティブ・コモンズ [表示-継承ライセンス](#)の下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は[利用規約](#)を参照してください。